2017 年 1 月 10 日提出
國學院大學 経済学部「演習Ⅳ」ゼミ卒業論文（担当教員 小木曽道夫）

新日本プロレスの変遷とＶ字回復

石田　丈士

目次

はじめに 1
第１章　日本のプロレスの始まり 1
第２章　新日本プロレスの歴史と現在まで 2
第３章　新日本プロレスにおける暗黒期とは 9
第４章　暗黒期からの脱却 12
まとめ 13

はじめに

この論文を書くに当たってなぜ新日本プロレスについてまとめようと思ったのかというと、2014、5 年代ごろから若い女性の間でプ女子（プロレス女子の略）と呼ばれるものを中心にプロレスがブームになっていることを知り、昔から格闘技やプロレスのファンであった私からすれば一時期の盛り上がりに欠けていた時代では考えられなかった若い女性たちがプロレスに興味を持つという現状に驚きました。そのことから、ここで改めて歴史の振り返りをすると共に、プロレスファンやプロレス業界でも口にされる「新日本プロレスの暗黒期」からいかに脱却して現在のブームにこぎつけたのかを考察し、未来のプロレス界の展望を論じていこうと思う

第１章　日本のプロレスの始まり[1]

日本人初の日本人プロレスラーはソラキチ・マツダとされている。戦前にはハワイでキラー・シクマ（志熊俊一）が日本人初の重量級プロレスラーとして活躍したことが、プロレス系の個人サイトに遺族が投稿したのを機に近年、明らかになった（後に週刊ゴングで漫画化されている）。その他、数名の日本人・日系人が主にアメリカでプロレスラーとして活動していたことが確認されている。マツダとともにレスラーとして活躍した三国山は帰国後の 1887 年（明治 20 年）に東京・銀座で「西洋大角力」を開催しており、これが日本初のプロレス興行とされている。しかし、観客は集まらず失敗に終わっている。

日本の大手プロレス団体は力道山がデビューした 1951 年を日本におけるプロレス元年

[1] 第 1 章は Nippon Communications Foundation(2017)を参照した。

としている。プロレス興行が根付いたのは戦後、力道山が 1953 年に日本プロレスを旗揚げしてからのことである。しかし戦前にもいくつかのプロレス興行があったことが確認されている。また、戦後連合国軍最高司令官総司令部 GHQ/SCAP による武道の禁止指令により柔道が禁止されていたため柔道家の牛島辰熊が 1950 年（昭和 25 年）2 月に国際柔道協会（プロ柔道）を設立し木村政彦、山口利夫、坂部保幸らが参加したプロ柔道として力道山より早くプロ柔道興行を始めていたが、4 か月 10 回の興行後、木村政彦、山口利夫、坂部保幸が日本プロレスに移籍し最終的には力道山の手によって統一される。戦後間もない頃で多くの日本人が反米感情を募らせていた背景から、力道山が外国人レスラーを空手チョップで痛快になぎ倒す姿は街頭テレビを見る群集の心を大いに掴み、プロ野球、大相撲と並び国民的な人気を獲得した。これが日本のプロレス界の成り立ちである。

第２章　新日本プロレスの歴史と現在まで [2]

この章では新日本プロレスの歴史、成り立ちを年代ごとにまとめていく。

1971 年 12 月、アントニオ猪木が日本プロレス選手会を除名され、日本プロレスを永久追放された。この件は密告事件と呼ばれている。

「密告事件」とは、力道山が亡くなった後の日本プロレス末期に、不透明な経理に不満を抱いていた馬場・猪木ら選手会一同は、一部幹部の退陣を要求しようと密かに画策していた。もし要求が受け入れられない場合は、選手一同が退団するという嘆願書に全員がサインをしていたという。上田は「猪木が日本プロレスを乗っ取ろうとしている」と幹部に密告していた。

一方で、猪木と腹心の仲でありサイドビジネスの手伝いもしていた経理担当の某氏が、不透明な小切手を切り、猪木を社長に祭り上げて日本プロレスの経営権を握ろうと画策しているかのような動きを見せたため、このことに気付き危機感を持った上田が馬場に相談したのが発端であったともいわれている。）この件で猪木と馬場の間には確執が生まれる。

日本プロレス協会を永久追放されたアントニオ猪木は自らの手でプロレス団体を作ることにした。年末に密告事件のあった翌年 1972 年 1 月 13 日、新日本プロレスリング株式会社を設立。設立時の日本人の参加プロレスラーはアントニオ猪木、魁勝司、山本小鉄、柴田勝久、木戸修、藤波辰巳、「テレビが付くまで」との条件付きで豊登が参戦。外国人の参加プロレスラーは選手兼ブッカーとしてカール・ゴッチ、レフェリーのユセフ・トルコが参戦。3 月 6 日、大田区体育館で新日本プロレス旗揚げ戦が行われ、メインイベントはアントニオ猪木対カール・ゴッチの時間無制限 1 本勝負でカール・ゴッチが勝利。現在でも 3 月前後に現大田区総合体育館で行われる試合は旗揚げ記念試合とされている。新日本

[2] 第２章はウィキペディア(2017 年 1 月 6 日)を参照した。

プロレスは「KING OF SPORTS」を標榜し、「ストロングスタイル」と呼ばれるファイトスタイルを掲げている。

ストロングスタイル（Strong Style）とは、プロレスのスタイルの１つであり、「強さ」による実力主義を前面に打ち出したスタイル及びコンセプトの総称として用いられる。別称「闘魂プロレス（とうこんプロレス)」とも呼ばれる。カール・ゴッチ流のレスリング技術の攻防を見せるスタイルと力道山流のケンカに近いプロレスの凄みを見せるスタイルを融合させたものが、アントニオ猪木流の「ストロングスタイル」であると述べている。また黒いショートタイツと黒いリングシューズ、肘、膝のサポーターなしの組み合わせをもって「ストロングスタイルの象徴」とされており、新日本プロレスでは多くのレスラーがこの組み合わせの姿から出発した。今現在でも練習生およびデビューしたてのヤングライオンと呼ばれる若手は黒のショートタイツ、リングシューズ着用が義務付けられている。リングドクター制を取り入れ、健康管理の面においては他団体と大きく差別化がはかられている。

ここからは、1973 年以降に起きた重要な事象を年ごとに挙げて、新日本プロレスの変遷について述べる。

1973 年では 4 月 1 日に経営難の日本プロレスに残留していたエースの坂口征二が小沢正志、木村たかし、大城大五郎、レフェリーの田中米太郎を連れて新日本プロレスに移籍した。4 月 6 日には、NET テレビ（現：テレビ朝日）がワールドプロレスリングの放送枠で新日本プロレスの中継を開始した。

1974 年には 5 月 8 日に東京都体育館で新日本プロレスと WWF（World Wrestling Federation 、1962 年に WWWF(World Wide Wrestling Federation)として設立し、1972 年に WWF に改称、2002 年に現在の WWE(World Wrestling Entertainment)に改称した）が業務提携を結んだことを発表する。

1975 年の 8 月 3 日にルイジアナ州ニューオーリンズで開かれた NWA 年次総会で NWA (National Wrestling Alliance)に加盟したが、全日本プロレスの圧力で団体としてではなく坂口征二と新間寿の個人加盟とされたのに加え「NWA 世界ヘビー級王者は新日本プロレスに参戦しない」(ウィキペディア(2017 年 1 月 6 日))という条件下で加盟が承認されることとなった。その年 12 月 11 日に日本武道館で百田家主催による「力道山十三回忌追善特別大試合」が行われていたが、新日本プロレス側は参戦を固辞して蔵前国技館で興行を開催した。

1976 年には、2 月 6 日に蔵前国技館で異種格闘技戦が行われ、アントニオ猪木対ミュンヘンオリンピック柔道 93kg 超級と無差別級の金メダリストのウィレム・ルスカによる格闘技世界一決定戦が行われ、アントニオ猪木が勝利した。6 月 26 日に日本武道館でアントニオ猪木対ローマオリンピックボクシングライトヘビー級の金メダリスト、WBA(World Boxing Association)・WBC(World Boxing Council)統一世界ヘビー級チャンピオンのモハ

メド・アリによる格闘技世界一決定戦が行われることになり試合は後に「猪木アリ状態」と呼ばれる膠着戦となり引き分けに終わった。当時のファン、関係者からは「世紀の凡戦」と評されるが後世の総合格闘技に多大な影響を与えた。（このころからプロレスこそが格闘技で最強であるという新日本の思想が強まり、猪木対他の種目の格闘家の構図がよく見られるようになる。）7 月 29 日にアジアヘビー級王座（新日本プロレス版）を設立。初代王者はタイガー・ジェット・シンとなる。8 月 4 日にアジアタッグ王座（新日本プロレス版）を設立。初代王者は坂口征二&ストロング小林組に決まる。

1977 年には、8 月 2 日に日本武道館でアントニオ猪木対全米プロ空手世界ヘビー級王者のザ・モンスターマンによる格闘技世界一決定戦が行われ、アントニオ猪木が勝利する。10 月 25 日には日本武道館でアントニオ猪木対プロボクサーのチャック・ウェプナーによる格闘技世界一決定戦が行われることとなりアントニオ猪木が勝利する。

1978 年には、4 月 4 日にアメリカのフィラデルフィア・アリーナでアントニオ猪木対全米プロ空手のザ・ランバージャックによる格闘技世界一決定戦が行われ、アントニオ猪木が勝利を収める。5 月に第 1 回「MSG シリーズ」を開催し、これも優勝はアントニオ猪木となる。12 月 18 日にアントニオ猪木がビンス・マクマホン・シニアから世界の強豪を相手に行われた数々の異種格闘技での功績を称え、WWF 世界マーシャルアーツ王座が贈呈されることとなりアントニオ猪木が初代 WWF 世界マーシャルアーツ王者に認定されることとなった。

1979 年には、6 月 17 日にパキスタンのカダフィスタジアムでアントニオ猪木対格闘家のジュベール・ペールワンによる格闘技世界一決定戦が行われ、試合結果は引き分けとなる。8 月 26 日に日本武道館で新日本プロレス、全日本プロレス、国際プロレスによる合同興行「東京スポーツ新聞社創立 20 周年記念 プロレス夢のオールスター戦」を開催した。

1980 年には、11 月に第 1 回「MSG タッグ・リーグ戦」を開催。優勝はアントニオ猪木&ボブ・バックランド組となる。

1981 年には、4 月 23 日に蔵前国技館でアニメ「タイガーマスク」とのタイアップ企画でタイガーマスクがダイナマイト・キッド戦でデビューし、タイガーマスクが勝利した。4 月にはアントニオ猪木が IWGP(International Wrestling Grand Prix)構想を発表。新日本プロレスが管理しているアジアヘビー級王座（新日本プロレス版）、アジアタッグ王座（新日本プロレス版）を統合しようという動きが起こる。

1982 年には、11 月 4 日に蔵前国技館でアントニオ猪木対ラッシャー木村&アニマル浜口&寺西勇のユニット「国際軍団」と 1 対 3 の変則マッチが行われ、アントニオ猪木のリングアウト負けとなる。

1983 年には、5 月に第 1 回「IWGP リーグ戦」を開催し、優勝者はハルク・ホーガンとなる。

1984 年には、2 月に前田日明が新日本プロレスを離脱し UWF(Universal Wrestling

Federation)を旗揚げし、藤原喜明、高田延彦らもこれに続いて離脱をする。6 月 14 日に第 2 回「IWGP リーグ戦」でアントニオ猪木がハルク・ホーガンに雪辱を果たし優勝する。しかし長州力の乱入を経て、リングアウト勝ちという不透明な決着に不満を爆発させた観客が次々と物を投げ、放火騒ぎや蔵前国技館の二階席のイスを破壊する者もいたなど、試合終了後に暴動寸前状態に発展し大問題となった。

1985 年には、3 月に第 1 回「ヤングライオン杯争奪リーグ戦」を開催し、優勝は小杉俊二となる。10 月 31 日には WWF（現：WWE）が新日本プロレスとの業務提携を解消する。WWF インターナショナル・ヘビー級王座、WWF インターナショナル・タッグ王座、WWF ジュニアヘビー級王座の 3 つを返上することとなる。12 月には活動停止状態にあった UWF と業務提携を発表する。12 月 12 日に IWGP タッグ王座を設立し。初代王者は藤波辰巳&木村健悟組となる。

1986 年には、2 月 6 日に IWGP ジュニアヘビー級王座を設立し初代王者は越中詩郎となる。

1987 年には、6 月 12 日に IWGP ヘビー級王座を設立し、初代王者はアントニオ猪木となる。同日、新日本プロレスに復帰した長州力が世代闘争を提唱し、それまでの軍団抗争の枠を取り払ったマッチメークが行われるようになったが、8 月 19 日、20 日の両国国技館大会をピークに次第に熱が覚め、10 月 19 日の静岡大会で長州力がタッグを組んだ藤波辰巳と仲間割れを起こし、世代闘争は終結、再び軍団抗争を展開するマッチメークに戻った。

1988 年には、2 月に第 1 回「TOP OF THE SUPER Jr.」を開催。優勝は越中詩郎となる。4 月にプロレスラー育成を目的とした「新日本プロレス学校」を開校。

1989 年には、2 月 22 日に両国国技館大会を 1 年 2 ヶ月ぶりに開催した。メインイベントとしてアントニオ猪木対長州力戦が行われ、長州がピンフォール勝ちを収める。続くシリーズでは、アントニオ猪木が出直し修行として、前座の第一試合に出場し、シリーズ終盤では鈴木みのるとのシングルマッチも実現した。4 月 24 日には東京ドーム大会を開催。アニメ「獣神ライガー」とのタイアップ企画で獣神ライガーが小林邦昭戦でデビューすることとなり、獣神ライガーが勝利する。メインイベントではアントニオ猪木がショータ・チョチョシビリと、リングのロープを取り払った円形リングで異種・格闘技戦を行ったが、5 ラウンド 1 分 20 秒で敗戦してしまう。この年の 7 月 24 日、アントニオ猪木が参議院議員選挙にスポーツ平和党から出馬して当選。これに伴い坂口征二が代表取締役社長に就任することになる。1990 年では 2 月 10 日に東京ドーム大会を開催。しかし直前にリック・フレアーが来日をキャンセルし、大会の開催自体が危ぶまれたが、全日本プロレスよりジャンボ鶴田、天龍源一郎、谷津嘉章、タイガーマスク、スタン・ハンセンの 5 選手が、ジャイアント馬場からの「坂口の社長就任祝い」で参戦、当日は前年を大幅に上回る観客が東京ドームに詰め掛けた。また同日、北尾光司のデビュー戦も行われ、クラッシャ

ー・バンバン・ビガロが対戦相手を務めた。4 月 13 日に東京ドームで新日本プロレス、全日本プロレス、WWF による合同興行「日米レスリングサミット」を開催。全日本プロレスと WWF が対抗戦を行う中、新日本プロレスは所属選手、レギュラー参戦選手同士による対戦が行われた。9 月 7 日の大阪府立体育館大会、9 月 14 日の広島サンプラザ大会に、武藤敬司がグレート・ムタとして出場。1991 年には翌年の 1 月 4 日の東京ドーム大会出場権が優勝者に与えられる、第 1 回「ヤングライオン・トーナメント」を開催。優勝は小原道由となる。同日にはレスリング選手の育成を目的とした「闘魂クラブ」を設立が発表された。3 月 21 日に東京ドーム大会を開催。メインイベントでは藤波辰彌対リック・フレアーが組まれ、藤波がピンフォール勝ちを収め NWA 王座を奪取するも、同王座を管理する WCW(World Championship Wrestling)からのクレームで、正式な NWA 世界王者とカウントされるかどうかは一時議論が分かれていた。またその頃、グレーテスト 18 クラブ王座を設立。初代王者はタイガー・ジェット・シンを破った長州力となる。同年 8 月に第 1 回「G1 CLIMAX」を開催。優勝は蝶野正洋となる。その際長州力はリーグ戦全敗を喫し、引退騒動を巻き起こした。１０月には第 1 回「SUPER GRADE TAG LEAGUE」を開催。優勝は藤波辰爾&ビッグバン・ベイダー組となる。飛んで 1994 年では 6 月に第 1 回「BEST OF THE SUPER Jr.」が行われ、優勝は獣神サンダー・ライガーとなる。4 月 16 日に両国国技館で新日本プロレス主催の大会、第 1 回「SUPER J-CUP」が開催され、優勝はワイルド・ペガサスとなる。10 月に第 1 回「SUPER GRADE Jr. TAG LEAGUE」を開催し、優勝は大谷晋二郎&ワイルド・ペガサス組となる。

1995 年には、10 月 29 日に大阪 ATC ホールで藤波辰爾が主催するプロレス興行「無我」を開催する。

1996 年には、8 月 2 日から 5 日、両国国技館で IWGP ジュニアヘビー級王座、インターナショナルジュニアヘビー級王座、NWA 世界ジュニアヘビー級王座、NWA 世界ウェルター級王座、WWF 世界ライトヘビー級王座、UWA 世界ジュニアライトヘビー級王座、WWA 世界ジュニアライトヘビー級王座、英連邦ジュニアヘビー級王座の王座統一を賭けたトーナメントが開催され、ザ・グレート・サスケが初代ジュニア 8 冠王者に輝く。

1998 年には、8 月 8 日、大阪ドーム大会を開催した。IWGP ジュニアタッグ王座を設立し、初代王者は大谷晋二郎&高岩竜一組となる。

1999 年には、4 月 10 日に東京ドーム大会を開催する。新日本プロレス初のノーロープ有刺鉄線電流爆破デスマッチが蝶野正洋対大仁田厚戦で行われ（ただし新日本プロレスは公式試合として認めず第 0 試合とした）、両者 KO による引き分けとなる。6 月 24 日、藤波辰爾が代表取締役社長に就任する。前代表取締役社長の坂口征二は代表取締役会長に就任する。10 月には第 1 回「G1 TAG LEAGUE」を開催。優勝は武藤敬司&スコット・ノートン組となる。

2000 年には、新日本プロレスが WCW の経営悪化に伴い業務提携を解消することとな

る。この年 4 月 14 日に気仙沼市総合体育館で行われた福田雅一対柴田勝頼戦の試合中に福田雅一が意識不明となり、4 月 19 日に死去。試合中の事故による死亡は日本の男子プロレスでは史上初となる。

2002 年には、4 月にロサンゼルスに新日本プロレス LA 道場を設立する。8 月に藤田和之が「本物の戦いをしたいという僕等の想い」という考えから「IWGP と対立するもの」と自ら位置づけ、NWF(National Wrestling Federation、全米レスリング連盟)ヘビー級王座が復活し、藤田和之、高山善廣、高阪剛、安田忠夫の 4 人による NWF ヘビー級王座決定トーナメントを開催することを発表。9 月 6 日に女子プロレスラーのジョーニー・ローラーが参戦。新日本プロレス初となる男女混合試合が行われた。10 月 14 日にも東京ドーム大会を開催する。

2003 年には、1 月 4 日に東京ドーム大会を開催。高山善廣対高阪剛による NWF ヘビー級王座決定トーナメント決勝戦が行われ、高山善廣 NWF ヘビー級王座を獲得した。4 月 23 日に IWGP U-30 無差別級王座を設立。初代王者は棚橋弘至となる。5 月 2 日に東京ドーム大会を開催し、新日本プロレスの独自ルールのアルティメット・クラッシュ形式による総合格闘技戦が行われた。

2004 年には、1 月 4 日に東京ドーム大会を開催し、IWGP ヘビー級王者中邑真輔対 NWF ヘビー級王者高山善廣による王座統一戦行われ、中邑真輔が IWGP ヘビー級王座防衛に成功すると共に IWGP ヘビー級王座と NWF ヘビー級王座を統一した。その後 NWF ヘビー級王座は再び封印された。6 月 23 日に経営コンサルタントの草間政一が代表取締役社長に就任。前代表取締役社長の藤波辰爾は取締役副会長に就任することとなる。

2005 年には、4 月に第 1 回「NEW JAPAN CUP」を開催し、優勝は棚橋弘至となる。5 月 26 日に草間政一が代表取締役社長を解任され、後任としてアントニオ猪木の娘婿であるサイモン・ケリー猪木が代表取締役社長に就任する。10 月に新日本プロレスの総合格闘技部門を設立する。11 月 14 日にアントニオ猪木が保有していた新日本プロレスの株式（発行済株式総数の 51.5%）をユークスが買収（後に発行済み株式を全取得し完全子会社化）し。ユークスが新日本プロレスの親会社になった（2006 年 4 月、ユークスから 2 名の役員が就任)。

2006 年には、7 月、ブロック・レスナーが「契約上のトラブル」を理由に訪日を拒否する。これを受けて新日本プロレスはブロック・レスナーが保持する IWGP ヘビー級王座（3 代目）を剥奪したが、ブロック・レスナーが IWGP ヘビー級王座（3 代目）のチャンピオンベルトを返還しなかった為、新日本プロレスは 2 代目 IWGP ヘビー級王座のチャンピオンベルトを使用することとなる。2007 年では 1 月 4 日に全日本プロレスの全面協力のもと新日本プロレス&全日本プロレス創立 35 周年記念大会「レッスルキングダム in 東京ドーム」を開催し 1 月 4 日の東京ドーム大会が恒例化する。3 月 6 日に後楽園ホールで第 1 回「NJPW グレーテストレスラーズ」授賞式がおこなわれ、アントニオ猪木、坂口征

二、星野勘太郎、山本小鉄が表彰される。3 月 9 日にサイモン・ケリー猪木が代表取締役社長を辞任する。4 月 25 日に取締役副社長の菅林直樹が代表取締役社長に就任する。

2008 年には、2 月 17 日に両国国技館で 2 代目 IWGP ヘビー級王座を保持する IWGP ヘビー級王者中邑真輔対 3 代目 IWGP ヘビー級王座を保持するカート・アングルによるチャンピオンベルト統一戦が行われ、中邑真輔が IWGP ヘビー級王座防衛に成功すると共に 2 つの IWGP ヘビー級王座を統一した。3 月 9 日に愛知県体育館で新調された 4 代目 IWGP ヘビー級王座が IWGP ヘビー級王者中邑真輔に贈呈された。

2009 年には、11 月 23 日に後楽園ホールで新日本プロレスと CMLL(Consejo Mundial de Lucha Libre)が業務提携を結んだことを発表される。

2010 年には、5 月に第 1 回「SUPER J TAG TOURNAMENT」を開催。優勝は金本浩二&エル・サムライ組となる。6 月に第 1 回「J SPORTS CROWN～無差別級 6 人タッグトーナメント～」が開催され。優勝は後藤洋央紀&田口隆祐&プリンス・デヴィット組となる。8 月 24 日に新木場 1stRING で新日本プロレス主催の若手選手による興行「NEVER」に開催される。11 月、第 1 回「J SPORTS CROWN～SUPER J TAG LEAGUE～」を開催し、優勝は邪道&外道組となる。

2011 年の 5 月 11 日にプロレスラー育成を目的とした「プロレス道場・プロ育成コース ヤングライオンクラス」を設立する。5 月 15 日に IWGP インターコンチネンタル王座を設立し、初代王者は MVP となる。

2012 年には、1 月 31 日にユークスが保有していた新日本プロレスの全株式をブシロードグループパブリッシングへ譲渡し、ブシロードグループパブリッシングが新日本プロレスの親会社となり、ブシロードグループパブリッシング代表取締役社長の木谷高明が代表権のない取締役会長に就任。新日本プロレス本社がブシロードグループパブリッシング本社のある住友中野坂上ビルに移転した。2 月 29 日に木谷高明とテレビ朝日を割当先とする第 3 者割当増資実施を発表。持株比率はブシロードグループパブリッシング：66.7%、木谷高明：23.3%、テレビ朝日：10.0%となった。7 月 24 日にレスリング選手の育成を目的とした「ブシロードクラブ」を設立する。10 月 20 日にブシロードからネット対戦型トレーディングカードゲーム「キングオブプロレスリング」が発売される。同年 10 月に第 1 回「SUPER Jr. TAG TOURNAMENT」を開催。優勝は KUSHIDA&アレックス・シェリー組となる。11 月 19 日に NEVER 無差別級王座を設立し、トーナメントの末初代王者は田中将斗となる。11 月に第 1 回「WORLD TAG LEAGUE」を開催し、優勝は後藤洋央紀&カール・アンダーソン組となる。

2013 年には、9 月 24 日に代表取締役社長の菅林直樹が代表取締役会長に就任し、執行役員で経営企画兼商品部の手塚要が代表権のない取締役社長に就任する。取締役会長の木谷高明は退任する。

2015 年の 7 月 2 日には、新日本プロレス公式サイトへの不正アクセスにより、約 1 万

8000 件の個人情報が流失していたことが判明し、謝罪会見が行われた。

2016 年に入り、NEVER 無差別級 6 人タッグ王座が設立され。初代王者は矢野通&ジェイ・ブリスコ&マーク・ブリスコ組となる。1 月 5 日には芸能事務所のアミューズと業務提携を発表される。2 月 25 日、新宿 FACE で新日本プロレス主催の若手選手による興行「LION'S GATE」を開催される。2017 年の 1 月 4 日東京ドーム大会があり執筆現時点での新日本プロレスの各王座が決まる。

表 1　2017 年 1 月 7 日時点での各王座一覧

IWGP ヘビー級王座	オカダ・カズチカ	第 65 代
IWGP インターコンチネンタル王座	内藤哲也	第 15 代
IWGP タッグ王座	矢野通、石井智宏	第 73 代
IWGP ジュニアヘビー級王座	高橋ヒロム	第 76 代
IWGP ジュニアタッグ王座	ロッキー・ロメロ、バレッタ	第 49 代
NEVER 無差別級王座	後藤洋央紀	第 15 代
NEVER 無差別級 6 人タッグ王座	棚橋弘至、中西学、田口隆祐	第 10 代

出典はウィキペディア(2017 年 1 月 6 日)

第３章　新日本プロレスにおける暗黒期とは

前章で年ごとの出来事を挙げ歴史を振り返ってきたが、果たしてどこに新日本の暗黒期というものがあったのかを整理していきたい。一般的にファンの間では 1990 年代末期頃から 2000 年代中頃までと言われているが果たして何を持って暗黒期と言われているのか、以下に毎年 1 月 4 日に恒例となった 1，4 東京ドーム大会の年代ごとの観客動員数があるので見てみようと思う。

表 2　1，4 東京ドーム大会の年代ごとの観客動員数

年度（日付は全て 1 月 4 日のもの）	動員数
1989 年	53,600 人
1992 年	60,800 人
1993 年	63,500 人
1994 年	62,000 人
1995 年	62,500 人
1996 年	64,000 人
1997 年	62,500 人

1998 年	65,000 人
1999 年	62,000 人
2000 年	635,00 人
2001 年	62,001 人
2002 年	51,500 人
2003 年	50,000 人
2004 年	53,000 人
2005 年	46,000 人
2006 年	43,000 人
2007 年	28,000 人
2008 年	27,000 人
2009 年	40,000 人
2010 年	41,500 人
2011 年	42,000 人
2012 年	43,000 人
2013 年	29,000 人（有料入場者数）
2014 年	35,000 人
2015 年	36,000 人
2016 年	25,204 人

出典は seki77(更新年不明)

この数字を見ても 1990 年代から 2012 年までは招待客等のかさましが数万人単位で行われていたことを考慮すると、動員数のみでは特に差は無いように見て取れる。

売り上げの面から見てみると、過去最高売り上げは 1997 年 39 億 3310 万円であり、最も低迷していた時期は 2000 年代後半の 11 億～15 億円で、2014 年 7 月期に 22 億円 6753 万円までに回復した(『東洋経済オンライン』(2015 年 1 月 4 日))。私が登録しているプロレスの有料チャンネル動画内において木谷オーナーが「売り上げは通期で 32～3 億というところでしょうから。過去 39 億というのがありましたので、これは来期にチャレンジしたいなと思います。」（新日本プロレスワールド(更新年不明)）と述べており、2016 年は 32，3 億円の売り上げ見込みがあることがわかる。単純に売り上げから見れば絶頂期から暗黒期、そして現在のプロレスブームへと売り上げがＶ字回復していることがわかる。以上のことから分かったことが、暗黒期と呼ばれる時期は絶頂期直後の 1990 年代後半から 2000 年代後半までであるという今までのプロレス業界で言われている暗黒期と一致しているとして間違いは無いと言えるだろう。ではなぜ売り上げが低迷しているような暗黒期と

呼ばれる時代の中でも動員数に関してはかさましをし、収益が低いという事態にも関わらず強引に東京ドーム大会を開催していたのかを考えていきたい。

新日本プロレスの暗黒期にあたる時期の『週刊プロレス』の記事や、棚橋(2015)や中邑(2014)という選手の自叙伝などを目にしても共通して書かれていることがある。つまり、新日本プロレスの暗黒期に当たる、ちょうど 2000 年ごろから「K－1」や「PRIDE」といった格闘技が一大ブームを巻き起こしたこれは私の一個人としての見解であるがつて新日本プロレスが旗揚げをし、「ストロングスタイル」の名の元にケガなどのリスクを問わない本気のぶつかり合いを見せることでプロレスがお茶の間のゴールデンタイムを席巻したときと同様、「K－1」や「PRIDE」といった格闘技はケガがつき物のような激しい殴り合い、ぶつかり合いが行われ、テレビ画面を通して観る者に訴えかける熱さががあったのではないかと考える。いつしか時代と共にある種「見世物」とも捉えられるようなシナリオの決まった戦いを見せるプロレスになっていく中で熱が冷めていくプロレスを格闘技イベントが食いつぶしてしまう構図が出来上がったのだ。単にテレビにおける視聴率低下やプロレスの放送枠の減少だけが暗黒期という事態を招いたわけではない。プロレス以外の格闘技全般が東京ドーム等の大規模会場での興行を成功させる中、新日本プロレスに対して更なる向かい風を吹かせた存在があった。それはプロレスリング・ノアの旗揚げである。2000 年 6 月 13 日、ジャイアント馬場死後の馬場元子体制による全日本プロレスの運営に強い不満を抱いていた所属選手達が団結して三沢光晴が中心となり多くの選手やレフェリー、社員などが全日本プロレスを退団、退社し 6 月 16 日、三沢が社長に就任してノアを設立した。

私が知る限りでも 2009 年の社長兼選手である三沢が広島県立総合体育館 小アリーナ大会での試合中に事故死するアクシデントが起こり、それが原因で低迷するまではプロレスリング・ノアの勢いは新日本プロレスを食いつぶさんとする勢いがあった。ノアにおける選手自身が社長となるシステムを新日本プロレスが採用していた時期があったものの、2000 年代前半までの選手間のトラブルによるいざこざの中、経営面でも選手や元選手が経営や試合の管理に関わったことも新日本プロレスの暗黒期を招いた原因のひとつとされている。特にアントニオ猪木や娘婿であるサイモン・ケリー猪木が経営に携わっていた時期が前述した総合格闘技ブームや、プロレスリング・ノアの台頭の時期と重なったこともあり大きな混乱を招いた。総合格闘技ブームに乗っかり、無理やり選手を総合格闘技ルールの大会に出場させるというアントニオ猪木の暴挙などもあり、新日本プロレスの将来のエース候補であった若手選手はケガに悩まされるなど散々な目にあっていたのも事実である。

団体の金銭的な面でもずさんなお金の管理が目立ち元選手や選手兼社長が辞任に追い込まれるケースも少なくは無かった。

以上の多くの要因が複雑かつ絶妙なタイミングで絡み合い、新日本プロレスの暗黒期は

生まれたと言える。

新日本プロレスの暗黒期における要点を整理すると

1.時期は 1990 年代後半から 2000 年代後半まで、2010 年代からは売り上げ回復の兆しが見られ、3.2016 年の売り上げは全盛期に追いつく勢いである。暗黒期の原因として、1.プロレス以外の格闘技ブーム、2.新日本プロレス以外の団体が力をつける、3.経営管理上での問題、があげられる。

第４章　暗黒期からの脱却

暗黒期と呼ばれた時代背景と要因がつかめたところで、前章では新日本プロレスの売り上げはＶ字回復をしたことに少し触れたのだが、この章ではいかにして暗黒期と呼ばれる時代を切り抜けたのかを考察していこうと思う。

現在新日本プロレスは世界のプロレス団体の中でも売り上げが著しく伸びており、新日本の選手が海外の他団体で試合をする際も大きな声援が飛び交っている。新日本の中での最年長選手、獣神サンダー・ライガー選手も WWE(World Wrestling Entertainment)の興行である NXT の試合に呼ばれるなど日本のレスラーの注目度が海外で高まっているのが事実である。2014、2015 年度において上位戦線で活躍し常にベルトの懸かったビッグマッチに絡んでいた中邑真輔、AJ・スタイルズの 2 選手が新日本プロレスを退団その後アメリカの WWE にてデビューをするという異例の事態が起こった。ファンからすれば新日本の一流選手を海外に引き抜かれたと言うショックな話題だが、逆に考えれば、それほど新日本プロレスで戦いを繰り広げている選手たちは世界的に見てもレベルの高い選手たちばかりであるということがわかる。WWE からの選手の引き抜きなども挙げられているが、それ以上に新日本プロレス自体が WWE のエンターテイメント構想に近づいているのも事実である。年間 100 試合を超える中ですべての試合をケガが伴うほどの勢いでやっていたら身体が持たないことが明白でありパフォーマンスの安定性を図るためにもかつてのストロングスタイルと呼ばれる方向性からの脱却が新日本プロレスのＶ字回復のカギを握っていることは確かだ。

選手自身の身体のケアや管理方法も暗黒期とは大きな違いがある。昔のようなむやみやたらに激しいぶつかり合いをするのではなく。ひとつのエンターテイメントとしてトップクラスのパフォーマンスを出しながらぶつかり合える環境に今の新日本プロレスはあると思う。ブックと呼ばれるシナリオだけでなくファンの予想をいい意味で裏切っていけるような試合展開や選手やユニット同士の抗争などすべてを含めてプロレスの試合というひとつのエンターテイメント空間を生み出しているのだ。

選手の質や試合に関することだけではなく、団体としての経営管理においても暗黒期のようなずさんな方法を取っておらず、ひとつの経営転換として 2005 年にオンラインゲーム会社のユークスが新日本を買収したことにより、企業に携わっている知識のある人たち

が経営サイドに回ることにより新日本プロレスという団体の会社としての基盤が固まったと言える。（現在は 2012 年にユークスが保有していた新日本プロレスの全株式をブシロードグループ（現：ブシロード）へ譲渡してブシロードグループパブリッシングの子会社になりブシロ代表取締役社長の木谷高明が代表権のない取締役会長に就任。新日本プロレスの本社がブシロードグループパブリッシングの本社がある住友中野坂上ビルに移転。）ブシロードの傘下の元、最近では芸能事務所アミューズと提携するなどして選手たちがメディア露出しやすい環境づくりをするなど多岐に渡るアプローチで世間に新日本プロレスを広めていこうとしている。

上記のような働きかけとプロレス女子のブームが重なり今の新日本プロレスの暗黒期からの脱却、そして奇跡とも呼べる業績のＶ字回復を果たすことができたのではないかと考察した。

まとめ

多くのスポーツが競技としての結果で競い合う中で、過程や選手の生き様、人間模様が軸となる特殊なスポーツであるプロレスは紛れも無く昔から多くの人々の心を揺さぶり続けてきたすばらしいものである。ブームと呼ばれる今、この火をひと時の流行り廃りで消してしまわぬよう業界全体が盛り上がっていくことをプロレスファンの一人として願うばかりである。

・参考文献

【日本語文献】

『週刊プロレス』ベースボール･マガジン社、2015 年度 1 号から 2016 年度 1 号（1・4 東京ドーム特別号）

棚橋弘至(2015 年 9 月 15 日)『全力で生きる技術』飛鳥新社

中邑真輔(2014 年 11 月 20 日)『中邑真輔自伝キングオブストロングスタイル 2005－2014』イースト・プレス

【インターネット】

ウィキペディア(2017 年 1 月 6 日)「新日本プロレス – Wikipedia」https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B0%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%83%97%E3%83%AD%E3%83%AC%E3%82%B9 、2017 年 1 月 6 日閲覧

seki77(更新年不明)「1989 年・1992 年～2004 年「1.4 東京ドーム大会」過去の観客動員数データ・比較・統計・主試合｜新日本プロレス - 起業反逆者のプロレス論ブログ」http://puroresu.hatenablog.com/entry/2016/12/26/104214、2017 年 1 月 6 日閲覧

新日本プロレス(更新年不明)「新日本プロレス公式ウェブサイト」http://www.njpw.co.jp/、2017 年 1 月 6 日閲覧

新日本プロレスワールド(更新年不明)3 月 3 日大田区総合体育館大会「木谷オーナーが発表！『J-CUP』開催！柴田とエルガンが選手契約！」
http://njpwworld.com/p/s_series_00379_1_sp、2017 年 1 月 9 日閲覧（有料チャンネルのため登録者のみ閲覧可）

『東洋経済オンライン』(2015 年 1 月 4 日)「これが新日本プロレス､闘魂の復活劇だ！ | ゲーム・エンタメ | 東洋経済オンライン | 経済ニュースの新基準」
http://toyokeizai.net/articles/-/56770?page=2、2017 年 1 月 6 日閲覧

Nippon Communications Foundation(2017)「日本のプロレスの歴史 | nippon.com」
http://www.nippon.com/ja/features/h00082/、2017 年 1 月 6 日閲覧